

新型インフルエンザから学ぶ サージ回避の手掛かり

いずみ 泉 のぶ お 夫

キーワード：新型インフルエンザ，サージ (surge, 大波)，学齢期，
静かな蔓延 (silent spread)，会話エチケット

要 旨

新型インフルエンザに対する抗体は幅広い年齢層で無く、また、学級閉鎖や感染対策の啓蒙は強化されたにも関わらず、感染者数は5～14歳の年齢層で突出し、サージをきたした。その原因は、この年齢層間で対面する会話が特に多い、かつ、他の年齢層とのそれは少ないこと、及び、無症状（特に発症前。不顕性感染や解熱後もある。）や、軽症の感染者からの伝染が、季節性の場合より多かったことにあると考えた。特にパンデミックでは、地域の流行開始から、皆が無症状のうちに、自身が既に感染者である可能性を自覚し、対面する会話時などにはマスクを着用する、また、一部屋で複数人が寝る時には、間に衝立などを置くべきである。さらに、冒頭の事実は、学齢期の大勢のワクチン接種が流行拡大の抑制になることの傍証になる。

はじめに

2009年の新型インフルエンザ（新型Flu）のパンデミック（PDM）は、肺炎の多発と¹⁾、感染者の学齢期（5～14歳）への際立った集中が特徴的であった²⁾。

新型Fluでは交叉反応性抗体は幅広い年齢層でほとんどない。季節性Fluでは不完全ながら保有される抗体により修飾されていた、何らかの

感染拡大に関する要因が、隠されることなく表出した結果が、新型Fluの後者の特徴となったのではなかろうか²⁾。

関連する文献を渉猟し、要因を探ってみた。

I. 感染感受性

季節性Fluの受診は、幾分か、しばしば5～9歳よりむしろ1～4歳が多いが²⁾、不完全な抗体ながら、年長児程、その保有状況はよいに相違ない。新型では幅広い年齢層で抗体の保有者はなかった（感受性は高い）。

米国では60歳以上の1/3が交叉反応抗体を保有

Nobuo IZUMI

出雲市立総合医療センター小児科

連絡先：〒691-0003 出雲市灘分町613